昭和前半期における臼杵石仏の研究

仲　嶺　真　信
（別府大学教授）

はじめに

すでに筆者は、平成８年に「大正期における臼杵石仏の研究」[*1]についてまとめたことがあり、続いて平成11年に小川琢治氏と石仏との興味深い関係を示す「『日本石仏小譜』と小川琢治博士」[*2]を紹介したことがある。事実この大正期は、日本における石仏（あるいは仏像）に関する研究の黎明期に合致していたわけだが、臼杵石仏の研究はその研究史において嚆矢をなすものと考えられる。それも主に中国石仏（石窟）の研究と前後して、しかも連動しながら調査研究が推進されていたことは興味深い事柄である。すなわち、濱田耕作と小川琢治の両氏の重大な関心からその研究の歴史は開始されたといっても過言ではない。後掲の研究年譜を参照すれば、そのことが一層明瞭となろう。ちなみに概観すれば、この昭和期の研究や記録活動は、多種多彩に展開されたことが、その特色に挙げられるが、中でも昭和前半期（初期から昭和20年代）においては、小野玄妙、濱田耕作、川勝政太郎の三氏、あるいは、大正期から昭和初期にかけての「臼杵石仏に関する忠実な調査記録」を残した小城長次郎氏は傑出している。一方、昭和後半期においては、数々の研究や紹介などがあるが、特に谷口鉄雄と賀川光夫の両氏の研究は出色できわめて重要な内容を含んでいる。なお、後半期の研究に関しては、別に稿を改めて考察する予定である。したがって今回は、前半期に焦点を絞って言及していくことにする。ただし、そのまえに昭和期全体の研究史を把握しておく必要があると考えるので、以下に関連すると思われる事柄を挿入しながら、その年譜を示しておこう。

Ⅰ　昭和期における臼杵石仏の研究史の概略

さて、以下に昭和期における臼杵石仏に関する研究史を略述しておこう。

〔１〕昭和期における臼杵石仏と関連する研究と事項（関連する重要なものを抜粋）

１　昭和２年２月25日　小野玄妙「大分佐賀両縣下の石佛」（『大乗仏教仏教芸術史の研究』大雄閣）[*3]
２　昭和２年７月１日　小野玄妙「弘法大師以前の密教藝術　－特に大分の石仏に就いて－」（『密教研究25』高野山大学密教研究会）
３　昭和３年〈1928〉１月　松本栄一「宇佐八幡と豊州の石仏」（『国華第38編第1冊446号』）[*4]
なお参考記事は以下＊印で示す。
＊　昭和３年６月　會津八一（47才）『奈良美術史料　推古篇』武蔵野書院[*5]
＊　昭和３年６月１日　田中一松「大分龍岩寺の佛像」（『中央美術151』　中央美術社）
＊　昭和４年〈1929〉４月　會津八一（48才）『東洋美術』飛鳥園
４　昭和４年６月　小城長次郎『深田の石仏』東京寓所にて執筆[*6]
＊　昭和４年４月５日　常盤大定／関野貞『支那仏教史蹟評解　一』仏教史蹟研究会
＊　昭和６年１月　會津八一、早稲田大学東洋美術史学会創設し会長となる。昭和６年２月、50才、早稲田大学教授となる。
＊　昭和６年９月１日　竹内四朗「大分石仏カメラ行脚　一　－大正14年９月紀行日記より－」（『都市と芸術』214　京都新田書房）
５　昭和６年11月１日　竹内四朗「大分石仏カメラ行脚　二　」（『都市と芸術215』　）

＊　昭和６年11月８日　常盤大定『支那仏教史蹟記念集評解』仏教史蹟研究会（昭和６年３月東京帝国大学退官を記念して）
＊　昭和６年１２月１日　竹内四朗「大分石仏カメラ行脚　三　」（『都市と芸術216 』）
＊　昭和７年10月10日　澤村専太郎『東洋美術史の研究』星野書店（臼杵石仏調査途中に印度留学）
＊　昭和７年１月１日　竹内四朗「大分石仏カメラ行脚　四　」（『都市と芸術217』）
＊　昭和７年２月11日　竹内四朗「大分石仏カメラ行脚　五　」（『都市と芸術218 』）
＊　昭和７年３月11日　竹内四朗「大分石仏カメラ行脚　六　」（『都市と芸術219 』）
6　昭和７年７月30日　久多羅木儀一郎「臼杵石仏史稿」（『臼杵史談第５号』*7）
＊　昭和８年５月　會津八一『法隆寺・法起寺・法輪寺建立年代の研究』東洋文庫論叢の一篇として刊行。文学博士授与（津田左右吉審査委員、昭和９年７月／52才）
7　昭和９年１月10日　川勝政太郎『日本の石仏』東方書院
8　昭和９年３月25日　「臼杵石仏の史蹟指定」（『臼杵史談第11号』臼杵史談会　／昭和９年１月21日史蹟名勝天然記念物保存法第一條によって史蹟に指定されたという記事*8）
9　昭和９年６月５日　小城長次郎「深田石仏指定の告示につきて」（『臼杵史談第12号』臼杵史談会）
＊　昭和12〈1937〉年３月　伊東忠太『伊東忠太建築文献（４）』龍吟社　／（『伊東忠太著作集４　東洋建築の研究　上・下』原書房　＊昭和57年８月31日　新装版）
＊　昭和12年９月　水野清一・長廣敏雄『響堂山石窟』東方文化学院京都研究所
＊　昭和12年７月７日　日中戦争（蘆溝橋事件）／同年４月10日　上原芳太郎編纂『新西域記上・下巻』東京・有光社
＊　昭和13〈1938〉年9月10日　関野貞『支那の建築と芸術』岩波書店（関野博士論文集全四巻中の第四巻：編纂委員長伊東忠太／「西遊雑信　上」に＜雲岡と龍門／天龍山石窟＞を収録*9
＊　昭和13年12月16日　木下杢太郎『大同石仏群』座右宝刊行会（大正９年〈1920〉17日間、画家・木村壮八を伴って大同へ）
＊　昭和13年４月　會津八一、早稲田大学文学部芸術学専攻主任教授となる。
10　昭和13年年７月25日　濱田耕作死亡　／　同年国家総動員法成立
＊　昭和13年８月８日　水野清一「雲岡石調査記」（『東方学報　京都第九冊』『中国の仏教美術』昭和43年〈1968〉平凡社に収録）
11　昭和13年９月１日　田中主水「深田の石佛を見る」（『史迹と美術94』史迹・美術同攷会）
12　昭和13年12月15日　久多羅木儀一郎「臼杵の石仏」（『臼杵史談第29号』）
13　昭和13年12月15日　甲斐文七「臼杵十三佛に就いて」（『臼杵史談第29号』）
14　昭和14年10月24日　東浦「臼杵石仏の保存運動」（『臼杵史談第31号』*10）
15　昭和14年12月20日　小城長次郎「臼杵石仏に対する諸大家の見解」（『臼杵史談第32号』臼杵史談会）
＊　昭和53年２月20日　小川晴暘『雲岡の石窟』新潮社　／昭和14〈1939〉年から雲岡石窟を３ケ月余撮影。昭和16年〈1941〉から雲岡石窟を第２回撮影。
16　昭和15年2月20日　小城長次郎「臼杵石仏に対する諸大家の見解（二）」（『臼杵史談33号』臼杵史談会）
17　昭和15年３月１日　玉蟲龍三郎「臼杵石仏の年代について」（『南画観賞９－３』南画観賞会）
18　昭和15年5月25日　小城長次郎「臼杵石仏に対する諸大家の見解（三）」（『臼杵史談第34号』臼杵史談会）

19　昭和15年12月10日　濱田耕作「日本の磨崖石仏像　上・下」（『日本美術史研究』座右宝刊行会／昭和18年11月15日五版発行[*11]）
20　昭和16〈1941〉年９月25日　水野清一・長廣敏雄『龍門石窟の研究』座右宝刊行会
＊　昭和17年９月30日　濱田耕作『東洋美術史研究』座右宝刊行会
21　昭和18〈1943〉年６月１日　川勝政太郎『日本の石仏』京都・晃文社
＊　昭和20〈1945〉年　8/15　終戦
＊　昭和23年５月　會津八一、早稲田大学名誉教授となる（67才）。
＊　昭和25〈1950〉１月１日　水野清一『CHINESE STONE SCLPTURE』座右宝刊行会
＊　昭和26〈1951〉－31〈1956〉　年　水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟　十六巻』京都大学人文科学研究所（1938年　春－1944年までの７年間の調査／長広氏は1934年初訪問）
＊　昭和27〈1952〉年４月30日　水野清一『雲岡の石窟とその時代』創元社

《以上前半期》

22　昭和30年５月30日　工藤進「深田石仏と真野の長者」（『臼杵史談第43号』）
23　昭和30年５月30日　図司翁「昭和二十九年石仏視察の珍客」（『臼杵史談第43号』[*12]）
24　昭和31〈1956〉年２月15日　木村重信「豊後の石仏について（一）」（『史想３』京都学芸大学国史学研究室内　紫郊史学会）
25　昭和31年７月５日　木村重信「豊後の石仏について（二）」（『史想４』）
26　昭和31年10月15日　酒井富蔵「豊後の石仏と地形地質」（『大分県地方史９』大分県地方史研究会
27　昭和31年10月31日「臼杵石仏の修復保存工事についての意見書」（『臼杵史談第46号』）記事
28　昭和32年１月15日 川勝政太郎『日本石材工芸史』綜芸舎
29　昭和32年１月30日　佐和隆研「日本の磨崖石仏」（『仏教芸術30　特集日本の石仏』）毎日新聞社　／なお、佐和隆研「日本の磨崖石仏」は、昭和36年５月１日刊行『日本の密教美術』（便利堂）、及び昭和54年12月１日刊行『日本の仏教美術』（三麗社）にも収録。
30　昭和32年１月30日　谷口鉄雄「臼杵石仏案内」及び谷口鉄雄・副島三喜男「九州石仏一覧」（『仏教芸術30　特集日本の石仏』）毎日新聞社
＊　昭和33〈1958〉年４月17日　北野正男『中国石仏』綜芸舎
31　昭和33年５月10日　谷口鉄雄・片山摂三『日本の石仏』朝日新聞社
32　昭和34年3月31日　高橋長一「臼杵石仏補修の概要について」（『臼杵史談第51号』）
33　昭和34年6月１日　田辺三郎助「書評　谷口鉄雄・片山摂三『日本の石仏』朝日新聞社刊」（『国華No.807』国華社）
34　昭和39年12月30日　三浦義臣「臼杵石仏をどう保存するか　－特に環境維持について－」（『臼杵史談第56号』）
35　昭和38年１月１日（初版）谷口鉄雄・片山摂三『臼杵石仏』臼杵石仏保存会　★重版多数[*13]
36　昭和40年10月31日　賀川光夫・今永清二『大分の石仏』日の丸印刷
37　昭和41〈1966〉年2月１日　久保田信雄「石仏保存工事報告」（『臼杵史談第57号』）
38　昭和41年８月25日　谷口鉄雄・片山摂三『臼杵石仏』中央公論美術出版社
39　昭和42年2月15日　原田種夫編／梅原治夫共著『臼杵石仏とその周辺』別府：西日本観光出版社
40　昭和42年５月30日初版第一刷　川勝政太郎『石造美術入門』社会思想社　／なお、同書は昭和42年6月30日初版第三冊刊行）
41　昭和42年12月31日　久保田信雄「臼杵石仏修理に関する調査」（『臼杵史談第59号』）

42　昭和45〈1970〉年2月15日　小野勝年編『日本の美術２　№45　石造美術』至文堂
43　昭和45年7月1日　中野幡能「豊後の磨崖仏をめぐる諸問題」（『日本歴史第226号』）吉川弘文館
44　昭和46年12月25日（第一版）　大久保貫之『臼杵石仏－義経と運慶の秘密－』誠文堂新光社
※なお同年２月20日刊行『観 臼杵石佛』いずみ印刷社がある。上記と同一内容である。
45　昭和47年７月１日　梅原治夫・三重野元『国東と臼杵－仏教文化のふるさと－ カラーブックス249』保育社
46　昭和48年12月20日　木村重信『平凡社ギャラリー９　豊後の石仏』平凡社
47　昭和48年10月25日　賀川光夫・藤田晴一『大分石仏行脚』木耳社
48　昭和49年9月1日　岩男順『大分の磨崖仏』九環
49　昭和50〈1975〉年９月30日　望月友善『大分の石造美術』木耳社（「臼杵市」の欄で扱う）
50　昭和50年12月10日　久野健『日本の美術36　石仏』小学館
51　昭和51年８月31日　復刻版編著・樋口隆康『豊後磨崖石仏の研究』臨川書店*14
52　昭和51年４月10日（第二版）　大久保貫之『臼杵石仏－義経と運慶の秘密－』誠文堂新光社*15
53　昭和51年　村田和義『豊後の磨崖仏』出版社*16？
54　昭和52年３月31日　臼杵市教育委員会「臼杵石仏群地域遺跡Ⅰ」（『臼杵史談第68号』）
55　昭和52年４月20日　中野幡能「謎の石仏」『大分の歴史第二巻　宇佐八幡と石仏』大分合同新聞社
56　昭和53年4月28日　北島学『豊後の磨崖仏』葦書房（写真集）
57　昭和53年３月31日　臼杵市教育委員会社会教育課編『臼杵石仏地域の民俗』臼杵市教育委員会社会教育課
58　昭和54年５月18日　渡辺克己『豊後の磨崖仏散歩』双林社
59　昭和53年8月15日　鷲塚泰光『日本の美術　石仏』至文堂
60　昭和54年10月10日　望月友善「豊後の磨崖仏とその周辺」（『日本の石仏』）太陽社
61　昭和54年10月10日　中野幡能「豊後磨崖仏造立の背景」（『日本の石仏』）太陽社
62　昭和54年9月1日　大久保貫之「臼杵石仏」（『臼杵史談第70号』）
63　昭和56年3月30日　中野幡能「国東・臼杵の磨崖仏と修験道文化」（五来重編『山岳宗教史研究叢書15　修験道の美術・芸能・文学Ⅱ』）名著出版
64　昭和56年3月31日　岩男順「磨崖仏」（『大分県史　美術篇』大分県 ）
65　昭和57年　賀川光夫「大分県の磨崖仏　－臼杵石仏の造顕と熊野大日石仏の姿態－」（日本郷土史刊行会『郷土史展望Ⅰ』1982年）和光出版
66　昭和57年11月1日　菊田徹「臼杵石仏周辺遺跡の発掘調査」（『臼杵史談第73号』）
67　昭和58〈1983〉年5月3日　大分の古代美術刊行会『大分の古代美術』大分放送
68　昭和58年12月20日　斉藤忠「韓国における窟仏・磨崖仏とその石工技術の日本への導入に関する一試考　－九州の磨崖仏に関連して－」（九州歴史資料館編『九州歴史資料館開館十周年記念　大宰府古文化論叢　下巻』吉川弘文館）
69　昭和59年４月28日　賀川光夫編『日本の石仏１　九州編』（国書刊行会　＊大護八郎監修）
70　昭和59年６月15日　賀川光夫「臼杵磨崖仏造顕の背景」（『史学論叢15』別府大学史学科
71　昭和63〈1988〉年11月30日　千種義人『大分の石仏を訪ねて』朝日新聞社　（1988年）

《以上後半期》

〔2〕昭和期における臼杵石仏の研究に関する２区分

前記に一覧した臼杵石仏の研究に関する年譜をふまえて概観するならば、昭和期の研究史は、お

よそ前半期・後半期の２期に大別して考えることができる。すなわち、次の通りである。

第１期　昭和前期（昭和元年～昭和20年代）

この時期は、基礎の確立から発展の時期と考えられる。

小野玄妙、濱田耕作、川勝政太郎、小城長次郎、久多羅木儀一郎、玉蟲龍三郎

第２期　昭和後期（昭和30年～昭和64年）

この時期は、発展・普及、修復事業の実施時期と見ることが出来る

木村重信、佐和隆研、川勝政太郎、谷口鉄雄・片山摂三、賀川光夫・藤田晴一、

中野幡能、岩男順、久野健、倉田文作、西川杏太郎、鷲塚泰光、望月友善

まず第１期は、大正期の基盤となる研究成果を踏襲しながら、多少の進展を見せた時期とも考えられる。次の第２期は、修復事業の進展とともに新たな調査研究が推進された時期である。換言すれば、特に考古学者の賀川光夫氏を主体とした学際的な調査研究が総合的に展開した時期である。なお、この第１期と第２期を通じて健筆をふるった研究家が、濱田耕作氏以来の伝統を守る川勝政太郎氏であることは特筆に値する。

さて、以下に昭和前半期の研究・記録・紹介等に焦点を絞って具体的に述べていこう。

II　昭和前半期の研究・記録・紹介等の特色

〔１〕昭和前半期の諸研究一覧

1　昭和２年　小野玄妙「弘法大師以前の密教藝術　－特に大分の石仏に就いて－」（『密教研究25』高野山大学密教研究会）

2　昭和４年６月　小城長次郎『深田の石仏』東京寓所にて執筆（私家版）

3　昭和６年　竹内四朗「大分石仏カメラ行脚　二　」（『都市と芸術215 』）

4　昭和７年　久多羅木儀一郎「臼杵石仏史稿」（『臼杵史談５』臼杵史談会）

5　昭和９年　川勝政太郎『日本の石仏』東方書院

6　昭和９年　「臼杵石仏の史蹟指定」（『臼杵史談第11号』臼杵史談会　＊この一文は、昭和９年１月21日史蹟名勝天然記念物保存法第一條によって史蹟に指定されたという記事）

7　昭和９年　小城長次郎「深田石仏指定の告示につきて」（『臼杵史談第12号』臼杵史談会）

＊　昭和13年７月25日　濱田耕作死亡

8　昭和13年　田中主水「深田の石佛を見る」（『史迹と美術94』史迹・美術同攷会）

9　昭和13年　久多羅木儀一郎「臼杵の石仏」（『臼杵史談29』）臼杵史談会）

10　昭和13年　甲斐文七「臼杵十三佛に就いて」（『臼杵史談29』臼杵史談会）

11　昭和14年　東浦「臼杵石仏の保存運動」（『臼杵史談第29号』）

12　昭和14年　小城長次郎「臼杵石仏に対する諸大家の見解」（『臼杵史談32号』臼杵史談会）

13　昭和15年　小城長次郎「臼杵石仏に対する諸大家の見解（二）」（『臼杵史談33号』臼杵史談会）

12　昭和15年　小城長次郎「臼杵石仏に対する諸大家の見解（三）」（『臼杵史談34号』臼杵史談会）

14　昭和15年　玉蟲龍三郎「臼杵石仏の年代について」（『南画観賞９－３』南画観賞会）

15　昭和15年　濱田耕作『日本美術史研究』座右宝刊行会

16　昭和16年　水野清一・長廣敏雄『龍門石窟の研究』座右宝刊行会

17　昭和18年　川勝政太郎『日本の石仏』京都・晃文社

18　昭和18年　濱田耕作『日本美術史研究』座右宝刊行会（＊第五版発行）前記15と重複

〔2〕昭和前半期の諸研究に関する要約

まず、上記研究の要約をしながら、順を追って紹介して行こう。

1）小野玄妙「弘法大師以前の密教藝術　－特に大分の石仏に就いて－」

これは、昭和2年に高野山大学密教研究会から出されものである。この論文については、すでに拙論「大正期における臼杵石仏の研究」においても触れた。今確認のため再度言及することになるが、この論文は、大正10年帝国美術院の命を受けて岡田三郎助氏と共に大分佐賀両県下の石仏調査を実施した際の報告が基礎になっている。ちなみに、小野氏の場合、この論文以前に「大分佐賀両県下の石仏」（大正11年3月28日発表）がある[*17]。小野氏は、この論文執筆の目的について次のように述べている。つまり、大分等に遺存する密教関係の彫像に関する造立年代を弘法大師以前のものと推察することが、一般の密教学の上から見ても過誤なきや否やを、先輩諸氏に向かって教示を仰ごうとした点にある。特に深田石仏の配置については、金剛界・胎蔵界の両面から考えを述べているが、一方に限定して言及を行ってはいない。先行する「大分佐賀両県下の石仏」とこの論文をまとめると、以下のように示すことが出来る。

すなわち、大分佐賀両県下の石窟仏像は、東亜における大陸系統の芸術として最終期のもの（極東における大陸系統の最終の美）。大分石仏の密教像の考察は、弘法大師等所伝のものと全然教系の違った異承の密教。大分の造像も、作者は決して一人や二人ではない。石仏の年代は、一定していないが、大分石仏、特にその密教像の主体は、決して藤原、鎌倉ではなく、どうしても弘法大師以前、即桓武天皇の延暦以前まで繰り上げてゆかねば、完全な歴史的説明を下すことは出来ない。現在から見れば、だたちに承服することはできないが、濱田耕作博士を中心とした京都大学の学際的報告書刊行以前の見解と見るならば、一部頷ける面もあることは事実である。しかし、今日では年代や密教的理解において甚だ相違が目立つ。

2）小城長次郎『深田の石仏』

この著作は、昭和4年〈1929〉6月東京寓所にて執筆したものであるが、手書きのガリ刷りで、出回った範囲も狭いものと推察される。無論、臼杵石仏について総合的に探究を進めて行く場合、必須の基本的資料として極めて重要である。これは、純粋な研究書や論文ではないが、これを看過しては臼杵石仏の研究は不十分である。永年臼杵町役場に勤務した小城氏は、当時の臼杵石仏関連の記事を克明に記録している。

この手書きの本は、後に『臼杵史談』に一部発表され活字版となっている。すなわち、「臼杵石仏に対する諸大家の見解」[*18]、「臼杵石仏に対する諸大家の見解（二）」[*19]、「臼杵石仏に対する諸大家の見解（三）」[*20]がある。一方小城氏は、昭和9年文部省の告示によって臼杵石仏が「本指定」となったことと、それを紀念して自身の所懐を述べて祝意を表したい旨を「臼杵史談」に紹介している。ちなみに既に執筆を完成させていた漫録一篇『深田の石仏』は、次のような構成である。すなわち「第一　巡覧の巻　一～三一」「第二　由緒の巻　一～一九」「第三　鑑賞の巻　一～二一」「第四　古文書の巻　第一篇～第九篇」[*21]となっている。

3）竹内四朗「大分石仏カメラ行脚　二　」

これは、カメラマンの竹内氏による記録であり、中に「大分県下に散在せる石仏群の所在一覧」を掲載する。竹内氏は、竜門石窟を想起しながら深田を訪問したことを述べている。ただし、当時臼杵川が氾濫し、風雨が激しいため写真は撮れなかったという。よって、あまり重要なことは記載されていない。

４）ａ久多羅木儀一郎「臼杵石仏史稿」[*22]

久多羅木氏の分類によれば、臼杵石仏には、１・深田石仏と２・門前石仏（臼杵町大字前田字大日山）がある。１はさらに①堂ヶ迫群（南津留村大字中尾字道ヶ迫）　②隠れ地蔵群（南津留村大字中尾字山王）　③十三仏群（臼杵町大字深田字南）　④伝満月寺址附近群（臼杵町大字深田字妙見）に分かれる。なお、１の①はさらに下群像（ａ・最低位群　ｂ・弥陀三尊群）と上群像（ｃ・地蔵十王群　ｄ・大日三尊群　ｅ・弥陀三尊群　ｆ・最高位群）に細分される。（下線：以下、仲嶺）

だだし、説明の順番として堂ヶ迫群最下位（実は前記ａ「最低位群」は「最下位群」と訂正すべき：仲嶺）群から述べている。なお、この群唯一の坐像が胴体のみが残った大日如来と述べているが、厳密に言うならば、定印阿弥陀坐像とすべきでり、大日と推測した根拠が稀薄である。この時、まだ九体阿弥陀が配置されているという認識はない。久多羅木氏は、ｅ・弥陀三尊群に関して、中尊は法界定印の阿弥陀と推測しているが、これも明らかに誤りであり、実際阿弥陀の定印は、法界ではなく上品上生印でなくてはならない。左右脇侍に観音・勢至を配置するものと考えている点は一応首肯される。ただし久多羅木氏は、本尊から見てではなく「向かって右左に観音・勢至」と記ている。本来、仏像は本尊から見て右左を決めるので、この場合は氏の左右観には注意が必要である。ちなみに、氏は作の優秀なること、全国石仏中の首位を占めることに言及している。

ｃ・地蔵十王群に関しては、中尊に半跏地蔵を配し、その左右に衣冠束帯道服の十王を五躯ずつ置くものと理解している。ｄ・大日三尊群に関しては、中尊は宝冠を戴く金剛界大日（智拳印）とし、その左右に釈迦・阿弥陀を、さらにその外側左右に観音・勢至を配置すると考えているが、先述のように氏の言う左右観は、本来とは逆転しているので注意を要する。

ｅ・弥陀三尊群に関しては、中尊に阿弥陀をその左右に釈迦・薬師を配置するものと考えている。堂ヶ迫群中最も佳作としている。ｆ・最高位群に関しては、中尊は釈迦、その左右に阿弥陀・薬師を、さらその外側左右に観音・勢至を配置すると見ている。

②隠れ地蔵群に関しては、中尊は釈迦、左脇右脇とも尊名不詳とする。中尊は深田石仏中第三位の巨像というが、管見の及ぶ限りでは面長（57.0cm）、面幅（60.0cm）[*23]が臼杵石仏中で最大値を示すので、よって臼杵石仏中で最大の重要な仏像と見ることが出来る。

③十三仏群に関しては、中尊は金剛界大日としている。後に一説では降三世明王と推測されていた像は、氏の判断では「仏菩薩？」（舟形光背をもつ）として断定を避けている。なお、不動の左脇菩薩像に関しては、「観音菩薩？」（化仏を現す。新納忠之介氏が、普賢菩薩と考定せりと指摘したことを挙げている）と見ている。

伝満月寺址附近群に関しては、密迹金剛・那羅延金剛、真名長者夫妻像、蓮城法師像の各像が安置されていることを述べている。

さて、門前石仏に関しては、中尊は大日、左右に釈迦・阿弥陀（その外側に多聞天）を配し、少し離れて不動、矜羯羅・制吒迦を置くものと見ている。

論文中に「四　深田石仏の史的研究」の項目があり、その中においてまず基本となる史料として石塔類及びその銘文を挙げている。すなわち以下の通りの金石文。中尾台の五輪塔（聖塔二基）：南塔　嘉応二年歳次□□七月二十三日／北塔　千部如法経願主遍照金剛　承安二年歳次壬辰八月十五日日次辛亥、堂ヶ迫浮彫五輪塔十基、伝満月寺址宝篋印塔（日吉塔）、後楽台側の角塔婆：建武元年甲戌九月一日円寂阿闍梨金剛仏子、妙見の八角碑：永禄十年丁卯十一月。

以上であるが、造立年代と造仏に関しては、おおむね平安期の京畿の作家及びその後継者の人々と見る濱田説を踏襲している。氏の論中で注目すべきは、このような大規模な仏教芸術の背景には、有力なる大檀那として、すなわち臼杵氏（大神氏）を擬している点である。極めて説得力のある地元の視点を導入した卓見である。

「五　臼杵石仏の顕揚」の欄では、明治期には殆どその存在さえ知られていなかったが、大正二年小川琢治氏の調査以来、中央に知られるようになったことを記している。ただし、お膝元ではまだまだ余り注目さてはいなっかたともいう。また大正四年八月十五日に鉄道開設を期して「臼杵案内」が発行されたが、その中では番外に「古蹟深田の石仏（堂ヶ迫弥陀三尊の小写真のみ）」を入れているともいう。これ以降、中央から学者諸名士等が次々と調査・視察に訪問したことも細かく触れている。すなわち、大正四年九月十七日の台湾民政官・内田嘉吉氏を筆頭に、昭和六年十二月十日　文部省督学官・長俊一に至る７２件の訪問が記録されている。実に驚くべき数であるが、番外に大正十五年十月のスウェーデン国皇太子同妃殿下の訪問を紹介している。なお、最後に小川琢治、大村西崖、工藤利三郎、小野玄妙、濱田耕作等各氏の研究が発表されたことに触れ、さらに地元における保存対策の高揚の様子が記されている。

４）b久多羅木儀一郎「臼杵の石仏」[*24]

これについては、熊本中央放送局より全国中継放送した際の記念に加筆修正して掲載した旨を冒頭に記す。語り口調でしかも前掲の論文をより平明にしていて読み易くなっている。

５）甲斐文七「臼杵十三仏に就いて」[*25]

甲斐氏は中尊について、胎蔵界大日と見て諸尊の配置（一から十三）を次のように推定している。ここでは要点のみに触れることにする。すなわち、十三体の群像中の不動明王の左隣の像（五）に関して、濱田氏は観音と見たが、甲斐氏は直接伺った新納氏の判断（宝冠中に化仏ではなく宝瓶を認識）を踏まえて普賢とすることに妥当性を見出している。また四の像は濱田氏は明言してないが、その形状の説明から青蓮華を持つ文殊と見ている。十の像は弥勒とするが、胎蔵界四菩薩が該当するものという観点から推測している。十二の像は？印がついているが、降三世または大威徳のいずれかの明王説を採用している。ただし、管見では地蔵が最も相応しいと考えている（詳しくは賀川光夫編『臼杵石仏』吉川弘文館　平成７年参照）。なお甲斐氏は、胎蔵界四仏と金剛界四仏は同体であるからとして、金剛界四仏を該当させる濱田説も必ずしも不当ではないとするが、管見では濱田説を穏当とすべきである。またこの配置は、かつて管見では金剛界成身会の中枢を示すものと指摘した（前掲『臼杵石仏』参照）。

十三	多聞天	（△◇▲◎）
十二	降三世明王？	（△▲降三世明王）（◇仏菩薩／◎地蔵か）（甲斐氏は降三世または大威徳とも）
十一	観音	（△◇▲◎）（又は◎金剛法菩薩）
十	弥勒	（△文殊／▲◎普賢）
九	鼓音	（△開敷華王如来／▲◎不空成就＊）
八	無量寿	（△阿弥陀／▲◎無量寿＊）
一	大日	（△◇▲◎）
二	宝幢	（△／▲◎阿閦＊）
三	開敷華	（△天鼓雷音如来／▲◎宝生＊）
四	文殊	（△普賢／▲◎文殊）（濱田氏は文殊とは明言せず）
五	普賢	（☆）（△弥勒／◇観音／▲◎勢至）（又は金剛利菩薩）
六	不動	（△◇▲◎）
七	増長天	（☆◇▲◎）　（△持国天）

☆印は新納説　△印は小野説　◇印は濱田説　▲印は谷口説　◎印は仲嶺説　＊金剛界

6）川勝政太郎ａ『日本の石仏』[*26]

70頁程の著作で、目次は次の通りである。すなわち、1・序説、2・日本石仏の源流、3・沿革、4・各時代の主なる遺品、5・石仏の信仰、6・結語。掲載された写真は、全部で48枚であるが、その中には大分県関係の写真が10枚あり、さらに臼杵石仏関連は4枚ある。この中で川勝氏は、臼杵石仏に関する略述を行い、その造営年代については、ホキ阿弥陀三尊像が平安初期頃、古園石仏群が平安後期[*27]、ホキ地蔵十王像が鎌倉初頭[*28]と指定している。

一方、同名著作のｂ『日本の石仏』（京都・晃文社　昭和18年）においては、口絵は全部モノクロ（32枚）だが、臼杵石仏関連は、ホキ弥陀三尊磨崖仏、ホキ地蔵十王磨崖仏、古園磨崖仏を紹介する。なお口絵においては、この他に大分県の石仏は高瀬石窟仏のみを紹介。

序において川勝氏は、濱田耕作氏から恩恵を受けたことを次のように記す。すなわち「(前略)私の石佛に對する關心を高めたものは、故濱田青陵博士の『豊後磨崖石仏の研究』であつた。そして、その書を助成されたのが、恩師梅原末治博士であることは、淺からむ因縁のつながりを感じる。こゝこに恩師・先學・學友より常に受けつゝある學恩に對し、衷心より感謝の意を表する次第である。[*29]」と、大正期からの京都大学の研究成果に格別なる思いを抱いている。ちなみに、この著作の目次は次の通り。すなわち、1）第一章　序説　1・石仏への関心　2・石仏の種々相　2）第二章　大陸との交渉　1・印度の石仏と石窟寺　2・西域から支那へ　3・朝鮮の石仏　3）第三章　日本石仏の流れ　1・石仏伝来　2・石人・石馬から石仏へ　3・磨崖石仏と石窟仏　4・石仏造立の普遍　4）第四章　古石仏の作者　1・石仏作者の伝統　2・遺物に見る作者名　5）第五章　信仰より見たる石仏　1・信仰の展開　2・弥陀と地域　6）第6章　古石仏巡礼（45例）7）附載・古石仏年表。

まず、「3磨崖石仏と石窟仏」において、唐代の石窟仏の系統と見るべき遺物として、大分関連の作例に以下のものを掲げる。すなわち「①大分県大分市古国　岩屋寺磨崖仏、②元町磨崖仏、③西国東群田染村熊野　熊野社磨崖仏、④玖珠郡東飯田村　不動磨崖仏、⑤大分郡東植田村高瀬高瀬石窟仏、⑥北海部郡南都留村中尾　ホキ磨崖仏、⑦同　山王山磨崖仏、⑧臼杵町深田　古園磨崖仏、⑨同　前田門前磨崖仏　⑩大野郡菅尾村浅瀬　菅尾磨崖仏　⑪大野郡犬飼町田原　犬飼磨崖仏、⑫大野郡南緒方村新　宮迫東磨崖仏／同　宮迫西磨崖仏」。ちなみに、奈良県・春日山石窟仏と地獄谷石窟仏をはじめ、栃木県・大谷寺磨崖仏群、福島県・泉沢石窟仏等も列記しているが、「(前略) この中、最も古いのは大谷寺のもので平安前期と推定される。更に一大群像として目を驚かせるものは、近年特に著名になった豊後臼杵附近のもので、前期から末期に及んでいる。(後略)[*30]」と言及している。

「6）古石仏巡礼（45例を掲載)」において、挿入図版と石仏位置略地図等を伴っているが、34-39までが臼杵石仏、40は高瀬石窟仏。なお、まだ熊野磨崖仏の紹介は見られない。

この著作において川勝氏は最近話題の磨崖石仏として臼杵石仏を紹介している。つまり「(前略) 大正の初年以来豊後に遺存する數々の磨崖佛が世に知られ、これが日本の石佛研究の盛んに行はれる端緒となつた。その中でも著名となつたのを臼杵附近の石佛群とする。この磨崖佛は近畿には特例を除く他見ることの出来ぬ唐代磨崖石佛の流れを示すものである。(後略)[*31]」と。

さて、順に従って、①「ホキ弥陀三尊磨崖仏」から見ていこう。中尊は定印を結び、両脇に観音・勢至を配置するものと見ている[*32]。ちなみに造立年代は、平安中期を降るものではないと推定しているが、昭和9年刊行の前掲書における年代（平安初期）と微妙にずれて遅くなっている。いわゆる九体阿弥陀像については、破損が甚だしいが、如来坐像一躯と八躯の立像等の存在を認めており、これらは平安後期の造立と見ている。②「ホキ地蔵十王磨崖仏」については、まずその脇の岩壁にある浮彫五輪塔を鎌倉期と見ている。注目すべき点は、十王群像について、倚像と判断し、半跏地蔵像について、古様さと温雅の趣を見出していることである。造立年代は、鎌倉初頭と見ている[*33]。③「ホキ大日三如来磨崖仏」については、いずれも裳懸座に坐してお

り、中尊に智拳印大日、向かって右に施無畏・与願印釈迦、左に定印阿弥陀を安置するものと見ている。造立年代は、平安後期に比定している*34。④「ホキ弥陀三如来磨崖仏」については、三尊とも裳懸座に坐す如来像で、中尊が最も破損しているが、定印阿弥陀と推測している。左右脇侍像は、尊名は決めにくいが、釈迦・薬師であろうと見ている。この諸仏の像容は、①「ホキ弥陀三尊磨崖仏」に近く、平安中期頃と推測している。なお愛染明王像に関して、多臂の坐像と見ているが、臂数（谷口説は四臂）を明示していない*35。ちなみに、この龕の（向かって）左隣に如来三尊坐像のあることに言及する際に、中尊釈迦、向かって右に定印阿弥陀、左に中尊とよく似た像で尊名の特定は困難であるが、おそらく薬師であろうと推測している。なお造立年代は、右隣の「ホキ弥陀三如来磨崖仏」と同じ頃と見ている*36。⑤「山王山三如来磨崖仏」については、三尊の尊名は明らかにし難いが、あるいは、三体とも釈迦像であるかも知れないので、三如来としておく方が無難としている。この三尊（特に中尊）は、臼杵石仏中で甚だしく異なった印象を与えるものとし、造立年代は平安後期と推測している*37。⑥「古園磨崖仏」については、十三躯の仏像群を並べた景観は他に比類のないものと言及、中尊は智拳印を結んでいたようにも見えるので、金剛界大日如来像と推定している。特にその相好は、藤原仏に通じ、気品ある美しさという点では第一に推すべきであろうと述べている。また、その左右に二躯ずつ配置された如来形坐像の痕跡から金剛界五仏と見ている。さらに五仏の左右に各二躯ずつの菩薩坐像を配した曼荼羅的な造像であったことを推察している。なおこのさらに外側に明王、天部を安置するものと考えている。しかし、不動明王、多聞天、増長天はほぼ判明するものの、（向かって）右方の（大日像を軸に線対称に不動像と対応する：仲嶺補足）像は、舟形光背もつ像であることが判るだけで欠落が甚だしいと言及している*38。なお川勝氏の「（前略）なおかゝる整然たる石窟寺のそれにも比すべき構成をもつ日本の磨崖佛の例として、これを見ることを喜ぶのである（後略）*39。」という見解は今なお首肯されるものである。造立年代年代は、平安後期の古いところと見ている*40。

ところで、川勝氏は後年「石材工芸」の観点から概説を行った『日本石材工芸史』（綜芸舎昭和32年）の中で臼杵石仏を簡単に紹介している（ただし、同書については昭和後半期で扱う予定）。

7）田中主水「深田の石佛を見る」

この中で田中氏はまず、ホキ石仏群から述べているが、中でも巨大な法量に注目し、阿弥陀三尊像について、九尺位の丸彫に近い手法で刻まれ、面相は甚だ厳粛、体躯は堂々として実に立派で、弘仁の趣があると評価している。この隣の九体阿弥陀については、破損が激しかったせいか、七体の小像があったことのみを記している。次に、堂ヶ迫石仏については、地蔵十王龕から説明するが、中尊に半跏像の地蔵を配し、その左右に十天像が上下二段に置かれていると記すが、十天は明らかに十王の誤りである。この仏像群の彩色に関して、当初からのものか注意を要すると指摘している。造立年代は、鎌倉初期と見ている。またこの隣は、第四龕と呼んでいるが、中尊は裳懸座に坐す智拳印大日、その左右に釈迦・阿弥陀、さらにその外側左右に観音・勢至の両菩薩立像が安置され、藤原の趣きが窺われると述べている。さらに、その隣の上群に三体の如来像と愛染明王とそれより大きい阿弥陀三尊があると記す。なお、破損が甚だしくて尊名が判然し難いが、制作は多分弘仁末期かと考えられたという。臼杵石仏の造立年代を判断する上で、きわめて重要な金石文史料であるが、五輪塔に関しては割愛していて残念である。山王山石仏については、俗称「かくれ地蔵」は、三体の如来座像で、中尊が釈迦であると述べている。中尊は特に大きく、約一丈で、左右の二体は大破損して印相を極め難いが弥勒・弥陀と思われるという。しかし、管見では、山王信仰との関連から、中尊は薬師、右脇侍は阿弥陀、左脇侍は釈迦と判断している。この三尊像は、堂ヶ迫の弥陀三尊に対して造顕されたものであろうというが、むしろ尊名

（山王山石仏中尊は薬師）法量や位置関係（山王山石仏は東側）から見るならば、ホキ石仏の阿弥陀三尊像（西側）に対して造立されたものと見ることができる。ちなみに、造立年代も様式も、堂ヶ迫の弥陀三尊と同時代であると考えている。十三佛についても記すが、如来、菩薩、明王、天部像の存在を略述するのみで、あまり具体的なことには触れていない。ただし、造立年代は藤原中期頃と見ている。

この他には真名長者夫婦像、蓮城法師像に触れるが、共に室町以後の製作だと聞いていると記す。宝篋印塔（日吉塔）は、「宝筐印塔」と表記するが、宝篋印塔が正しい。年代は鎌倉初期と見ている。なお、この雑誌の最後にある編集私記 において、今夏濱田耕作博士を失ったことの哀悼記事がある（昭和13年〈1938〉年７月25日　濱田耕作氏死亡　＊補足：仲嶺）。

８）東浦「臼杵石仏の保存運動」[*41]

この中で東浦氏は、従来、現在以上に損傷のないように保存対策をと計ってきたが、やっとこの年８月９日豊原教務部長の石仏視察を契機に保存運動が本格化するとしてその予想を記す。すなわち、県と町が連繋してその遂行に邁進する運びとなり、また町では「史蹟臼杵石仏保存会」の会則も大体出来たので、今度こそは頓挫せずに是非実現を期そうと述べている。

９）玉蟲龍三郎「臼杵石仏の年代について」

この著作において、玉蟲龍三郎氏は、小川琢治、濱田耕作、梅原末治、岡田三郎助、小野玄妙の各氏の調査研究について言及している。玉蟲氏の執筆動機は、当時の「最近の実地調査」にもとづいて造像年代を一考する中で、一つの問題提起してみたいということである。まず、仏龕の配置について簡略に記す。つまり、主要なものは、大日山と堂ヶ迫の山腹に存在し、この他に仁王像、真野長者夫妻像、蓮城法師像、宝篋印塔があることに触れている。ちなみに、大日山十三佛は、相当ひどく破損しており、堂ヶ迫群像は、上群と下群分かれ、また上群が更に四群に分かれていること。さらに下群は阿弥陀三尊で、上群の第一群は地蔵菩薩を中心に左右に衣冠束帯道服姿に笏を持った十五（王の誤記か）」像が刻まれていると記す。次いで第二群は、大日如来を中心に、右に釈迦像、左に阿弥陀像が刻まれていると記す。この隣の第三群は、高さ約六尺の阿弥陀像を中心に、左に薬師を、更に左方に愛染明王が刻まれている述べている。さらにこの隣の第四群は、釈迦を中尊に左右に二菩薩を刻んでいるが甚だしく破損していると指摘している。

一方、造像年代について、およそ奈良朝と平安朝説とがあるが、一部に推古朝説も唱えられていると言及している。特に大村西崖、小野玄妙の両氏の説も紹介されているが、いずれも奈良朝説を唱えているという。しかし、推古朝説、奈良朝説も信ずることは出来ないとしている。さらに考察は、平安朝説に及ぶが、玉虫氏は濱田氏の説を大方支持している。ただし、濱田氏の見解においては、それぞれの石仏が平安初期から鎌倉にかけて何回にも作られたものとしているが、このことに関して玉虫氏は、果たして妥当であろうかと疑問を投げかけている。玉虫氏は、大日山十三佛の中尊は、平安朝のものとは考えられず、どうしても鎌倉初期の作と思われるという。これは、すでに濱田氏が、様式論から大日山十三佛は、鎌倉期のものと認めたことによるとする。しかし、厳密に言うならば濱田氏は、鎌倉期の気風に近いものがあるが、総合的に勘案すれば平安中期以降藤原期の作と見ていることを指摘しておこう[*42]。ただし、玉虫氏は、堂ヶ迫下群の阿弥陀三尊の中尊の相好には、藤原時代の特徴がないと、一旦述べたものの、断定を避けるためか、すぐさま、もしかすれば、藤原末でしかも鎌倉初期への過渡期位とも見られぬことはないとぼかしている。いわゆる「藤末鎌初」説という便利ではあるが、曖昧な概念を導入している。続いて、堂ヶ迫上群の地蔵菩薩及び十五（王の誤り）像は、鎌倉初期ごろのものと見ている。なお、「隠れ地蔵」は、釈迦三尊と記すだけで具体的尊名配置は見られない。要するに、玉虫氏は、深田石仏の造像年代を平安末から鎌倉へかけての時代に局限してもかまわないのではないかと思う

と結論している。ちなみに、玉虫氏は、濱田氏が、小野氏の奈良朝説に影響されて平安初期と考えているが、深田石仏については、もう少し時代の上限を下げた方が種々の理由から都合がよいのではないかと思うと指摘している。その理由は、堂ヶ迫上群の五輪塔（嘉応二年銘）は、藤原末期であって、まさに鎌倉初期に移らんとする時で、この時大体深田石仏の大部分が完成されたと見られるからと述べ、さらに同時に満月寺も建立され、五輪塔も献納されたと見てはどうであろうかともいう。全体的に妥当な見解であるが、厳密に言うならば、濱田氏は、平安初期造立説を提示したのではなく、様式上の問題として、平安初期以来の伝統とその形式化が確認されることを指摘しているのである[*43]。この点は、例えば、翻波もしくは漣波式衣文や裳懸座の問題に言及する場合には、看過できずまさしく濱田氏の炯眼に敬服せざるを得ない。事実、臼杵石仏においては、平安初期から鎌倉に及ぶ様式の問題が、新旧混在しているやや複雑な状況が認められる。

ところで、玉蟲氏は次のような管見とは異なる一見解を述べている。以下に要点を示しながら述べていこう。すなわち、王蟲氏の文章にａからｅまでの記号を付けて、すぐ後の括弧内に管見を示す。

「大日山十三佛中尊及び堂ヶ迫下群阿弥陀三尊に幾分典型的な特徴を発見出来るとしても、その他の諸像、特に衣紋にいたっては粗野な刻み方が見られ、線が洗練されていない。(a) 阿弥陀中尊はその面貌の美しさにもかかわらず頭が大きすぎて横から見ると特に見苦しい点(拝観する際の眼の位置、つまり視点、視角、視距離等の問題に十二分に留意すれば、この見解は氷解することを指摘しておく。)、いづれの石仏も中尊は比較的念入りに刻んであるが、脇侍は一体に粗略になっているなどに地方性を感じさせる。(b)各石仏の製作年代が違うにしても様式、手法が不統一であることや、蔽堂などを葺瓦をもって葺いていないことなど（発掘遺品として、「建久瓦」が出土しているのでこの見解は明らかな誤りである。）(c) 中央政府の命によって国家的に建立されたものでないことを明らかに示している（実は、臼杵石仏の造営の背景には、摂関家・天皇・院等が密接に関わっている。また臼杵は荘園としても藤原摂関家、特に忠実、忠通親子、忠通の令室宗子、九条兼実等とも緊密に関与している。[*44]）。

(d) 石仏の製作は伝説の真野長者を信じないとしても、地方の豪族がこれを作らせたことに間違いあるまい（事実、大神氏の一派である臼杵氏の勢力伸展、またその結果の荘園支配、あるいは武士階級の臼杵氏の氏族と密接に関わる三輪信仰や山王信仰などの問題を勘案すれば、この推測はきわめて妥当である。[*45]）。文献や記録によって確かめえない考古学的な時代は、その下限近く考える方が無難であろう。(e) 様式論から余りに上限を尊重するのは、上限と下限との開きが大きい時には危険が伴い易いことは明らかなことである。特に深田石仏を初め豊後地方の都から遠く離れた辺鄙な地方においては都会から伝わって来る文化は交通不便な時代にあっては相当後れるものと考えてよく、時には一時代近くさえ後れることがないとも限らない。そこで、前時代の様式が、すでに都では廃ったころに隆盛を極めるというような現象がないとはいえないであろう（現段階において発掘遺品から判断すれば、特に古園石仏群の造営年代は、12世紀半ば頃に置くことが妥当と考えられる。平安初期説は成立し難いが、ただ衣文や裳懸座などに、平安初期以来の形式化した技法上の問題は散見されることも事実である。）奈良時代の国分寺のように国家的な統一事業として地方へ寺院を建立する場合なら知らず、地方の一豪族が都ぶりを真似て起こす寺院建立などでは色々な様式的なものが混乱することも考えられる。深田石仏はこの一つの例を提出するものではあるまいか。終わりに以上の試説は多分の想像を交えたもので、一つの問題提起にすぎぬことを附け加えておきたい。」と総括している。この時代にあって、今なおきわめて示唆に富む問題を提起している点は特筆に値する。（下線と括弧内文章：仲嶺）。

10）濱田耕作『日本美術史研究』

この中に「日本の磨崖石仏像　上・下」が収録されている。すでに知られていた論文であるが、改めて『日本美術史研究』として再録されたことは極めて意義深い。（詳しくは、仲嶺真信「大正期における臼杵石仏の研究」『芸術学論叢12号』1996年参照）。なお、この著作に続いて、翌年昭和16年には、京都大学が実施した中国石窟調査研究の報告書として、水野清一・長廣敏雄『龍門石窟の研究』（座右宝刊行会）が刊行された。もともとこの調査研究は、昭和11年から濱田博士の指導の下に進められたものであった。よって、本来ならば濱田氏がこの著作に序言を記すはずであったが、残念ながら業半ばにして昭和13年７月25日に濱田氏が死亡されたので、かつて明治33年に濱田氏と龍門石窟に同行された経験を持つ小川琢治氏が濱田氏に代わり序言を記した経緯を述べている[*46]。事実この龍門石窟訪問の経験から５年後に、豊後の石仏、なかでも臼杵石仏の素晴らしさを世界に紹介する結果を招いた訳である。この『龍門石窟の研究』以前に京都大学は考古学の濱田耕作氏を中心とした記念碑的著作『豊後磨崖石仏の研究』[*46]を刊行している。翻って考えれば、中国における石窟研究の歴史は、豊後磨崖石仏の研究成果に学びながら、その基礎の上に築かれて行ったということができよう。

以下に参考までに、『豊後磨崖石仏の研究』以後の日本における中国の石仏・石窟の研究を列記してみよう。

1　水野清一／長廣敏雄『響堂山石窟』（東方文化学院京都研究所　昭和12年）
2　関野貞『支那の建築と芸術』（岩波書店　昭和13年９月10日）＊なお関野博士論文集全四巻中の第四巻（編纂委員長伊東忠太）中の「西遊雑信　上」に＜雲岡と龍門／天龍山石窟＞を収録。
3　昭和13年から19年まで水野清一／長廣敏雄両氏は雲岡石窟の調査研究に従事。その成果は『雲岡石窟16巻32冊』として昭和31年に出版完了。
4　木下杢太郎『大同石仏群』（座右宝刊行会　昭和13年12月16日）※なお、木村杢太郎氏は大正９年17日間、画家・木村壮八氏を伴って大同へ。
5　水野清一「雲岡石調査記」（『東方学報　京都第九冊』）昭和13年８月８日）※なお後に『中国の仏教美術』（平凡社　昭和43年）に収録。
6　小川晴暘『雲岡の石窟』（新潮社　昭和53年）※実際小川氏は、昭和14年から雲岡石窟を３ケ月余撮影。昭和16年から雲岡石窟を第２回目の撮影。その中から選定してここに掲載。
7　水野清一・長廣敏雄『龍門石窟の研究』（座右宝刊行会　昭和16年）

以上のように、昭和13年から16年頃は中国における石窟調査活動が本格化した時期と考えられるが、さらに昭和30年代に入ると、京都大学考古学教室が実施した中国石窟研究の金字塔と考えられる報告書『雲岡石窟16巻32冊』が昭和31（1956）年に出版完了し、それに触発されたかのように日本の石仏に関する研究、とりわけ豊後石仏の研究が目立ってくる。ただし、昭和30年代以降の臼杵石仏に関わる研究については、別に稿を改めて発表する予定であるのでここでは詳論しない。

おわりに

以上、前章において昭和前半期における臼杵石仏の研究史を回顧しながら、その研究や紹介・解説などの特色について論究してきた。大正期の臼杵石仏の研究については拙著において詳論したので、ここでは余り深く立ち入らないが、事実大正期は、日本における石仏研究の黎明期であった。

これに続く昭和前半期（昭和初期から20年代まで）は、その研究の進展や影響力はまだ温存され、もしくは継続され、ちょうど大正末年からこの時期にかけて架橋しながら調査研究を行った研究者も決して少なくない。小野玄妙と濱田耕作の両氏は正しくその代表格である。また、濱田氏の薫陶を受けた研究者・川勝政太郎氏も登場した。とりわけ川勝氏の研究は、日本中の石仏へと広がりを持ち、その研究の裾野が各地においても展開した。ちなみに、川勝政太郎氏は、昭和９年に『日本の石仏』（東方書院）、また昭和18年に『日本の石仏』（京都・晃文社）を刊行しているが、その意欲的で画期的な出版は、日本の石仏研究を大きく推進させた功績を示したことは事実である。

一方、この前半期は前記の研究者達の研究や紹介にも触発されて、臼杵石仏の存在地元大分県においても関心が高まり、臼杵石仏に関する研究が発表されはじめている。これは「臼杵史談会」を中心とする会員達に顕著であるが、その代表格に久多羅木儀一郎氏が挙げられる。このような最中、昭和13年に濱田耕作氏が死亡されたことはこの上なく残念であったが、昭和15年に濱田耕作『日本美術史研究』（「日本の磨崖石仏像　上下」を収録）初版が刊行されたことは、極めて意義深いことであった。この著作は重版（５版）印刷されているが、おそらくこの時代の「日本美術史研究」をリードしたパイオニアとして歓迎されたものと思われる。

ともあれ、この前半期の研究者の初めを小野氏が飾り、その終わりに濱田氏が待ちかまえていて、さらに川勝氏へバトンタッチしリレーしていることは、極めて象徴的なことのように思えるする。これは筆者一人のみの単なる感慨であろうか。年譜から見ると一層明瞭だが、昭和後半期における臼杵石仏の研究者として、木村重信、佐和隆研の両氏は際だっている。両者とも昭和30年代に日本の磨崖石仏に関わる研究を行っているが、両者は京都大学出身者であり、明らかに小川・濱田氏らの研究を継承しているといえる。その上、後半期の代表的研究者である九州大学の谷口鉄雄を中心とする研究にも色濃く影響を与え、さらに飛躍的な成果を生み出させている。その辺の事柄については、稿を改めて論究する準備を進めているので、詳しくはそれに譲ることにする。今はその前半期と後半期において、興味深い関連性を持つことを指摘して、その繋がりについては素描程度に留めておく。

最後に既に指摘したことだが、再度確認をしておこう。すなわち、中国における石窟研究の歴史は、主に豊後磨崖石仏の研究成果に学びながら、その基礎の上に築かれて実施されたということができるのである。

付記　『臼杵史談』の再刊本では一部不便であったので、原書『臼杵史談』の閲覧に際しては、現臼杵史談会会長の吉井正治氏に御便宜と御高配を賜りました。御教示と御厚情に対しまして衷心より感謝申し上げます。

＊１　仲嶺真信「大正期における臼杵石仏の研究について」（『芸術学論叢第12号』別府大学文学部美学美術史学科　平成８年）

＊２　仲嶺真信「『日本石仏小譜』と小川琢治博士」（『芸術学論叢第13号』別府大学文学部美学美術史学科　平成11年）

＊３　小野玄妙『小野玄妙仏教芸術著作集第八巻・大乗仏教仏教芸術史の研究』（開明書院　昭和52年６月25日）

なお『小野玄妙仏教芸術著作集』は全十巻。ちなみに「大分佐賀両県下の石仏」は大正11年３月28日発表、本論文は大正10年帝国美術院の命を受けて岡田三郎助指導のもとに踏査した際の報告書の草案。関東大震災時に焼失し公刊の機会を逸した。その後これを旧草のまま復活製版した。なお本論文は当初『大乗仏教仏教芸術史の研究』（大雄閣　昭和２年２月25日）に収録。

＊４　臼杵石仏に関する記述は見られない。

＊５　『日本詩人全集16　釈迢空・会津八一』（新潮社　昭和43年）掲載年譜参照、以下の會津氏に関する事項は本書を参照した。

＊６　臼杵町役場に永年勤務後、東京で執筆。活字版は『臼杵史談』に収録済み。

＊７　復刻版『臼杵史談（第一巻）』（歴史図書社　昭和53年）に収録されているが、それでは発行年が不明であったので、臼杵史談会会長・吉井正治氏と共に原版『臼杵史談』を確認した上奥付を明記した。

＊８　執筆者は不詳。

＊９　もとは『建築雑誌第32輯第384』（大正７、12）／『同第33輯第393』（大正８、9）／『同第34輯第397』（大正９、１）に収録したことを記す（関野貞『支那の建築と芸術』709頁参照）

＊10　現臼杵史談会・会長の吉井正治氏のご教示によれば、東浦は、久多羅木儀一郎氏の号。久多羅木氏は、郷土史家で臼杵史談会を主宰し『臼杵史談』を刊行。

＊11　もともと「日本の磨崖石仏像　上」は『思想　第48号』（岩波書店　大正14年10月１日）に、「日本の磨崖石仏像　下」は『思想　第50号』（岩波書店　大正14年12月１日）に収録。なお、『思想　復刊版４（第39-50号）』は岩波書店から1982年12月８日に再刊行。

＊12　筆者は「図司翁」と記名されているが、臼杵史談会会長・吉井正治氏によれば、狭間俊雄氏のこと。

＊13　谷口鉄雄・片山摂三『臼杵石仏』（臼杵石仏保存会）は、昭和38年１月１日初版、同39年４月１日第２版、同4年７月１日第３版、同42年４月１日第４版、同44年８月１日第５版、同47年６月８日第６版、同51年１月５日第７版がある。

＊14　原書は『豊後磨崖石仏の研究』で副題が「京都帝国大学文学部考古学研究報告書第九冊　大正13年４月－大正14年３月」、発行は大正14年８月10日付け、岩波書店刊。

＊15　重版多数あり。背昭和54年９月30日（第三版）、同56年４月１日（第四版）。

＊16　未詳。

＊17　注３参照。

＊18　同論文は復刻版『臼杵史談（第四巻）』（歴史図書社　昭和54年）に再収録。

＊19　注18と同一

＊20　注18と同一

＊21　小城長次郎「深田石仏指定の告示につきて」（『臼杵史談12号』臼杵史談会　昭和９年）

＊22　同論文は復刻版『臼杵史談（第一巻）』（歴史図書社　昭和53年）に再収録。

＊23　法量に関しては賀川光夫編『臼杵石仏』（吉川弘文館　平成７年）41頁「表　臼杵石仏群各尊の法量」参照。

＊24　同論文は『臼杵史談（第五巻）』（歴史図書社　昭和54年）に再収録。なおこの他に関連する論考として、久多羅木儀一郎「大神臼杵氏について」（『臼杵史談第二号』臼杵史談会　昭和６年８月15日）がある。同論考は、復刻版『臼杵史談（第一巻）』（歴史図書社　昭和54年）に再収録。

＊25　同論文は、『臼杵史談（第五巻）』（歴史図書社　昭和54年）に再収録。

＊26　川勝政太郎『日本の石仏』（東方書院　昭和９年１月10日）は約70頁の著作。一方、同名だが、増補版（約300頁）というべき著作として、川勝政太郎『日本の石仏』（京都・晃文社　昭和18年6月1日）が刊行されている。

＊27　川勝『日本の石仏』（東方書院）31頁

＊28　同書44頁

＊29　前掲『日本の石仏』（京都・晃文社）３頁

＊30　同書71-73頁

＊31　同書242頁

＊32　同書244-245頁

＊33　同書245-246頁

＊34　同書248-249頁

＊35　同書250頁
＊36　同書251頁
＊37　同書252頁
＊38　同書254-255頁
＊39　同書255頁
＊40　同書256頁
＊41　注10参照
＊42　前掲『豊後豊後磨崖石仏の研究』95頁
＊43　同書118頁
＊44　仲嶺真信「臼杵ホキ石仏第二群第一龕仏の成立年代について」（『仏教芸術229号』毎日新聞社　平成８年）
＊45　仲嶺真信「臼杵石仏群の造立年代とその背景について」（『史学論叢第25号』別府大学史学研究会　平成７年）
＊46　水野清一・長廣敏雄『龍門石窟の研究』（座右宝刊行会　昭和16年）序を参照
＊47　注14参照。復刻版は臨川書店から編著・樋口隆康氏により、昭和51年８月31日付で刊行